

# 中村哲と滝沢克己

主任司祭 晴佐久昌英

対談相手の谷津賢二監督の口から「滝沢克己（かつみ）」の名前が出てきたときは、本当に驚きました。かつて私を苦悩から救ってくれた、私淑する恩師の名前だったからです。先日の「シグニス平和賞」の受賞式・上映会でのことです。授賞作品は「荒野に希望の灯をともし」という、アフガニスタンで多くの人命を救った医師、中村哲の活動を紹介したドキュメンタリー映画です。上映後に監督と対談したのですが、楽屋で打ち合わせをしていた時に突然、その名前が出たのでした。

谷津監督は、最初に中村哲の取材に行ったときに「男惚れ」して以来、現地に21年間通いつめ、のべ1000時間の映像を撮って映画を完成させました。そのように長年中村哲を見続けてきた監督だからこそ、彼の本質をだれよりも見抜いていたのでしょう。クリスチャンとしての中村哲の宗教的な普遍主義に深い敬意を抱いていたそうです。それを知って、私が「彼の言葉と行いこそ、真のキリスト教だと思います」と言うと、監督は、「彼の信仰の原点は『神は私たちと共にある』にありました」と言うのです。思わず「それって滝沢克己じゃないですか」と言うと、「ええ、そうです。中村先生は九州大学の医学部卒ですが、そのころ九州大の哲学科の教授をしていた滝沢克己から大きな影響を受けたんです」と言うではありませんか。そこで、「わたしも神学生時代、キリスト教の真の普遍性を模索して苦悩していた時に、滝沢克己の思想に出会って救われたんです」と言うと、納得したように言いました。「なるほど、晴佐久さんの話が、中村先生がいつも話していたことと同じなのは、そのせいだったんですね」と。

わたしが神学校に入学した時は、すでに第二バチカン公会議から15年たっていましたから、「現代社会と対話する教会」という基本姿勢は、とりあえずは確立していました。ローマ帰りの若手の神学者たちから「全人類の救いの秘跡」としての教会論を学び、「諸宗教の中に見出される真実なものを何も排斥しない」という公会議の宣言に感動したものです。しかし、「イエス・キリストによる救い」の真の普遍性についてはまだまだ曖昧さが残っていると感じていましたし、そこをクリアできない限り、世俗化極まった現代世界の中でカトリック司祭として語り、行動することに意味はないと直観していました。

特にその頃は、親鸞聖人の他力の教えや一遍上人の宇宙的念仏観に傾倒していたこともあり、「無名のキリスト者」とか、「聖霊の働きによって、すべての人にキリストによって救われる可能性がある」というような、いわば「どこか上から目線」の表現に違和感を感じていました。全人類にとっての救いをどのように平明に物語り、それをどのように自然体で実践するべきか。それは、私にとってはどうしても避けては通れない命題だったのです。

そんな時、神学校の図書室で偶然出会った滝沢克己の透明感あふれる思想に、文字通り心震えました。「ああ、これなら信じられる。これが正しいならば、キリスト教は生涯をかけて実践するに足る教えだ」と心底共感して、苦悩は解消したのでした。それはよくよく考えてみれば、イエスが常々語っていた天の父の愛の普遍性と、イエスが常々実践していた無条件の愛を第一にするという、当たり前の真理にすぎないのですが、それを優先順位のトップに置くまっとうな神学は、そう多くはありません。「もうあなたはすでに天において救われている、それに目覚め、信じる事で地においても救われる」と私が言うのも、滝沢克己が「神が共にいてくださるという第一義の接触と、それを信じて受け入れる第二義の接触」をきちんと分けて提示してくれたからこそです。

世界は加速度的に結ばれています。今後「キリスト教の洗礼を受けなければ救われない」というような限界ある表現は通用しなくなるでしょう。「キリスト教」とは何か、「洗礼」とは何か、「救い」とは何かを、普遍主義の透明な光の中で問い直して、もう一度すべての人の救いを語る言葉として語り直さない限り、世間一般の人にとっては、教会とカルト教団のどこが違うのか理解できないはずです。

中村哲が救った人たちは、ほとんどがイスラム教徒です。彼は多くの診療所を造り、用水路を掘って砂漠を緑に変え、イスラム教徒たちから絶大な信頼を得ました。映画では、彼がついにはイスラム教のモスクまで建設したので、地元の人たちが涙ながらに喜んで、竣工式で小柄な中村医師を大男がかつぎあげ、周りに群衆が押し寄せる様子が映し出されていました。大勢のイスラム教徒たちに担ぎ上げられる、一人のキリスト教徒。それこそは、滝沢克己の教えの実現であり、全人類の救いの目に見えるしるしにほかなりません。その後中村医師はテロリストに殺害されましたが、現地ではその偉業をたたえて記念塔が建てられ、そこには彼の顔を描いた巨大な壁画が掲げられました。偶像崇拜を禁じ、大統領の顔すら掲げないイスラム教の国で、唯一許された壁画だと聞きました。

谷津監督が、「今日は、中村医師こそ真のキリスト信者だと聞いて、本当に嬉しかった」と繰り返し言うので、「わたしも一人のキリスト者として、東京のコンビニの過酷な現場で働くイスラム教徒の若者たちを集めて、教会で月に一度ハラル食を振舞っていますよ」と申し上げると、「中村先生がそれを聞いたら、どんなに喜ばれたことでしょう」と言ってくれました。